

子ども用



伝道地便り

2020年 第2期 トランス・ヨーロッパ支部

- | | |
|---------------------|--------|
| 第1話「こわがらないで」 | ノルウェー |
| 第2話「2つのバラがついたヘアバンド」 | ノルウェー |
| 第3話「ただ『ノー』と断ればいい」 | フィンランド |
| 第4話「平安な姉妹」 | セルビア |
| 第5話「宣教師の子」 | キプロス |
| 第6話「ペットが欲しいと祈った」 | キプロス |

ADVENTIST
MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部

伝道地便りの使い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列举いたします。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。
主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」
紹介しましょう。

1. こわがらないで

ノルウェー



レベカ・エマ・ケルシ 8歳

8歳のレベカちゃんは夏休みにお母さんと一緒にエストニアに行きました。おじいちゃん、おばあちゃん、その他の親せきに会うためです。楽しかった休みが終わって2人は北極圏の北にあるノルウェーのおうちに戻ってきました。

人口1万人の小さな町ソートランドに帰ってくることができて、レベカは幸せでした。ところがふとその時、ある女の子のことが頭に浮かびました。

その子は夏休みの前にとってもいじわるなことを言ってきたのです。レベカは彼女に会うのがこわくなりました。彼女はまたいやなことを言うてくるかもしれない。

レベカがお母さんに悩みを話すと、お母さんはやさしくレベカを抱きしめました。

「私も不安なことがあるの」とお母さんは静かに言いました。「数日以内に看護の仕事新しく始めることにしたの。仕事でちゃんとノルウェー語が話せるかどうか心配よ」

エストニア生まれのお母さんはノルウェー語を4年以上勉強してきましたが、まだ難しいと感じていました。

レベカを見つめながらお母さんはこう言いました。「神さまは何でもできる方よ。神様はわたしたちに助けを用意してくれているわ。祈りましょう」

2人で目を閉じるとお母さんは祈りました。

「神様、レベカと私のために助けを備えてくださることを感謝します」

レベカは祈りながら、お母さんと自分を助けてくださることを神様に感謝しました。

「聖書のイザヤ書41章10節に神様からの約束が書かれているの」とお母さんが言いました。

お母さんはその聖句を暗唱していたので、レベカに自分のあとからついて言うように勧めました。

「恐れるな、私があなたと共にいる。」

とお母さんが言うとレベカもくり返して言いました。

「恐れるな、私があなたと共にいる。」

「たじろぐな、私があなたの神である。」

「たじろぐな、私があなたの神である。」

レベカもお母さんのあとについて言います。

「私はあなたを奮い立たせ、助け」

「私はあなたを奮い立たせ、助け」

「私の勝利の右手で支える。」

「私の勝利の右手で支える。」

お母さんと話し終わるとレベカは気が楽になり、うさぎのぬいぐるみで遊ぶために出ていきました。でも夜ベッドに入るとまたあの子のことが気になってきました。お母さんが頭をなでながら言いました。

「私も新しい仕事のことを考えると不安なの。でも神様は何でもおできになるお方だから、

わたしたちのために道を用意してくださるのよ」

レベカとお母さんは目を閉じて、神様に感謝の祈りをささげました。それから2人は聖書のイザヤ書 41 章 10 節を声に出して言いました。

「恐れるな、私があなたと共にいる。」とお母さんが言うと

「恐れるな、私があなたと共にいる。」とレベカもくり返して言いました。

「たじろぐな、私があなたの神である。」

「たじろぐな、私があなたの神である。」

「私はあなたを奮い立たせ、助け」

「私はあなたを奮い立たせ、助け」

「私の勝利の右手で支える。」

「私の勝利の右手で支える。」

次の朝も2人は祈り、イザヤ書 41 章 10 節を声に出して言いました。次の夜もそして、朝食、昼食、夕食でも学校と新しい仕事のことを祈りました。毎日、このように祈りました。日中もレベカが学校のことが心配になったり、お母さんが仕事のことで不安になると祈りました。

まもなくレベカもイザヤ書 41 章 10 節を暗記して、お母さんと同時に声を合わせて言えるようになりました。

学校が再び始まった日、レベカの心から不安は消えていました。そして嬉しいことに相手の女の子はいじわるなことをいっさい言いませんでした。それどころか、女の子は親切で親しげでした。レベカは神様が祈りを聞いてくださったことをとても喜びました。

一方、新しい仕事を始めたお母さんも、ノルウェー語で苦勞することもなく、楽しく患者さんたちのお世話ができました。お母さんも祈りが聞かれたことをとても喜びました。

今期の 13 回献金の一部はレベカの住む町ソートランドに神様を伝える青少年コミュニティセンターを開くために用いられます。皆様の惜しみない献金を感謝します。

〈お話のヒント〉

- ・ノルウェーとソートランドを地図で見つけましょう。北極圏を探しましょう。レベカとお母さんが夏休みに行ったエストニアも見つけてみましょう。
- ・お母さんの名前はマリオン・ケルシ。お父さんはミハリ・コロシといってセルビアの人でソートランドで建設の仕事をしています。
- ・レベカとお母さんがエストニア語でイザヤ書 41 章 10 節を暗唱している様子を You Tube で見てみましょう (bit.ly/Rebeka-Keresi)。
- ・フェイスブック又は ADAMS データバンクの写真をダウンロードしてみましょう。フェイスブック (bit.ly/fd-mq)、ADAMS データバンク (bit.ly/fear-not-ted)。
- ・13 回献金プロジェクトの写真をダウンロードしましょう (bit.ly/ted-13th-projects)。

2. 2つのバラがついたヘアバンド

ノルウェー



アースネ・バーグランド 6歳

幼いアースネちゃんは朝8時にベッドから転がり出ました。シャワーに入ってから着替えると長い金髪の髪をていねいにとかしました。髪の毛をいつもきれいにしておくために、彼女には2つの選択肢がありました。ヘアバンドをつけるか、お母さんかお父さんにポニーテールに結んでもらうか、どちらか選ばなくてはなりません。

アースネはポニーテールにするのがきらいでした。髪の毛を自由にたらししておくのが好きなのです。

「いちばんお気に入りのバラがついたピンクのヘアバンドはどこかしら？」

アースネはバスルームの周りを探しました。シャワー脇の白い木製ベンチには服がいくつか置かれていました。でも2つのピンクのバラがついたヘアバンドは見当たりません。アースネは心配になってきました。

もしかしたらなくしちゃったのかも……。それは困ります。もしそれがなかったらママかパパが彼女の髪の毛をポニーテールにしなくて

はなりません。でもポニーテールはいやなのです。彼女は髪の毛を自由にたらししておきたいのです。

突然、アースネはリビングのソファにヘアバンドを置き忘れたかもしれないと思いました。ところがソファに行っても見つかりません。

彼女はいいよいよ心配になってきました。ポニーテールはどうしてもいやなのです。

その時アースネの頭に一つの考えがひらめきました。

「お祈りしよう」

赤ちゃんの時から両親と共に毎朝、毎晩、そして食前にお祈りをささげてきました。お父さんとお母さんはいつでも、どんなことでも、また小さなことでも神様に祈ってよいと教えてくれました。

アースネは神様が祈りを聞いてくださることを知っていました。彼女が病気の友だちのために祈った時、彼らはよくなりましたし、お父さんが一度かぎをなくした時も、祈るとそれが見つかったのです。

アースネはもう一度ソファを見てからバスルームに戻りました。白い木製のベンチのそばに立って、彼女は手をくんで目を閉じました。

「愛するイエス様、2つのピンクのバラがついたヘアバンドを見つけられますようお助けください、アーメン」

目をあけるともう一度ソファの所へ戻ることに決めました。

リビングのソファへ行き、もう一度見ました。すると、なんとそこに2つのピンクのバラがついたピンクのヘアバンドがあったではありませんか！ しかもソファのまん中に置かれたクッションの上に。

アースネの心は喜びでいっぱいになりました

た。大きな笑顔を浮かべてそのヘアバンドをつかむと、それを頭につけました。どうしてそこにあったのか分かりません。そこに置いた記憶はありませんでした。でも神様はすばらしい方法で彼女の祈りに応えてくださったのです。もうポニーテールは必要ありません。長い金髪の髪をたらしられています。

6歳のアースネはノルウェーの北の方にある小さな町ソートランドの小学校に通う1年生です。彼女は神様が祈りを聞いてくださるということを信じて疑いません。それが小さなことであっても、です。

彼女は言います。「神様は祈りを聞いてくださるお方よ。だって私の祈りを聞いてくださったもの」

今期の13回献金の一部はアースネの住むソートランドに神様のことを伝える青少年コミュニティセンターを開くために用いられます。皆様の惜しみない献金を感謝いたします。アースネのお父さんであるケネス・バーグランドはノルウェーのソートランドにある出席者16名のセブンスデー・アドベンチスト教会の牧師です。13回献金による青少年コミュニティセンターにおいて、アースネのお父さんも働きを助けることになっています。

〈お話のヒント〉

- 地図でノルウェー、ソートランドを見つけてみましょう。北極圏の位置も確認しましょう。
- アースネちゃんを You Tube で見るができます (bit.ly/Asne-Berglan)。
- 子ども達に神様が今までどのように自分たちの祈りを聞いてくださったかたずねてみましょう。
- フェイスブック又はADAMSデータバンクから写真をダウンロードすることができます。
フェイスブック (bit.ly/fb-mq)、
ADAMS データバンク (bit.ly/asne-adams)。
- 13回安息日プロジェクトの写真をダウンロードしましょう (bit.ly/ted-13th-projects)。

豆知識

- ノルウェーにはトナカイがいます(カリブーとも呼ばれる)。

この動物は北半球の北極圏付近にのみ生息しており、えさを求めて長距離移動しながらくらしています。頭についている枝角で地面の雪をかき分けてえさを探します。また、トナカイは哺乳動物の中で唯一、紫外線を見ることができます。



3. ただ、「ノー」と断ればいい

フィンランド



シルビア・レパラ 23歳

12歳になった年は、シルビアにとって大きな変化をもたらしました。まず中学生になり、新しい学校での学びが始まりました。また、今まで両親と教会に通っていましたが、行かなくなりました。さらに初めて巻きタバコを吸い、初めてお酒を飲みました。

ある日、シルビアは友人たちのグループでピキオの町を歩いていました。しゃべったり笑ったりしていると、同級生のある子がポケットから巻きタバコを引っ張り出しました。

「見て、わたしタバコを持っているのよ、試してみたくない？」と彼女は言いました。

シルビアは今までタバコを吸ったことがなく、何と言ってよいか分かりませんでした。シルビアは彼女を見つめてから他の子たちにも目をやると、何人かはタバコを吸っていました。

友人たちはシルビアをじっと見つめ、彼女の答えを聞こうと待っています。シルビアはもし自分がタバコを断れば、バカにされたり仲間外れになるのではないかと恐れました。

「もちろん1本いただくわ」と彼女は言いました。

巻きタバコはいやな味がして、吸うとせきが出ました。でも彼女はにっこり笑って見せました。カッコよくなった気分でした。

数週間後、ある友だちが家に泊まりにやってきました。シルビアの両親が眠って、女の子たちがベッドルームで2人きりになった時、その友だちがハンドバックをあけて、ウォッカという強いお酒のビンを取り出しました。「飲んでみようよ!」と彼女は言いました。

「これ、どうしたの？」シルビアはおどろいてたずねました。12歳の女の子が店でアルコール飲料をどうやって手に入れたのでしょうか。

その友だちはきまりが悪そうでした。「うちの食器棚から盗んできたの。飲んでみたい？」と彼女はささやきました。

シルビアはウォッカについて何も知りませんでした。「もちろん」と彼女は答えました。

シルビアはタバコを吸った時と同じように何だかカッコよくなった気がしました。

シルビアはその年、何度も友だちからタバコやお酒をすすめられました。そして、回を重ねるごとに、それらを吸ったり、飲んだりすることに対する抵抗感が減っていきました。時々、自分からタバコやお酒をもらうこともありました。カッコいいと思ったからです。

彼女はますますタバコを吸い、お酒を飲むようになりました。それから数年たった時、彼女はとうとう勉強することが困難な状態となり

ました。心がいつも悲しく落ち込んでいて、夜は毎晩、昼間も度々泣いていました。

その時、彼女は神様を思い出し、必死に叫んだのです。「どうか神様。私はこれ以上落ち込んでいたくありません！」

ある日、彼女は両親にさそわれて、ピキオにあるアドベンチストの学校、フィンランド・ジュニア・カレッジの祈りの集会に参加しました。両親はアドベンチストの信徒ではありませんでしたが、クリスチャンのプログラムに参加することが好きだったのです。

シルビアは皆が賛美歌を歌うのを聴きました。彼女は祈りました。集会が終わって家に帰る時、彼女の目には涙があふれていました。神様のことをもっと知りたくなったのです。

次の朝、家で聖書を見つけた彼女はそれを開き、1章読みました。その次の朝も聖書の別の章を読み、その次の朝も読みました。友人たちが飲みに行こうと誘うと、彼女は断りました。彼らと一緒にいるとお酒やタバコの誘惑を招くことになるので彼女は知っていたからです。もうお酒を飲んだり、タバコを吸ったりしたくありませんでした。もうお酒やタバコがカッコいいとは思いません。

しばらくすると、友人たちからの誘いは来なくなりました。でもシルビアは悲しくありませんでした。彼女はもっとよいものを見つけたのです。イエス様と一緒にいるのです。

現在、23歳のシルビアは理学療法士になるためにフィンランドの首都ヘルシンキで学んでいます。彼女はたくさんアドベンチストの友人たちと共にアドラの炊き出しで困っている人々への料理や配食を行っています。シルビアは子どもたちにお酒やタバコに近づかないようにと教えます。

シルビアはこう言います。「お酒やタバコをすすめられた時、断る強さがあればよかった。体にいいことないし、カッコよくなんかない。本当よ」

〈お話のヒント〉

- ・フィンランド、ヘルシンキ、ピキオを地図で見つけてみましょう。ピキオはトゥルクの町のすぐ外にあります。
- ・よくないことをしようと誘われた時、1回目に「ノー」と断る大切さを子どもたちに教えましょう。
1回「ノー」と断れば、2回目からはもっと断りやすくなります。でも最初に誘惑に負けてしまうと、2回目はもっとたやすく誘惑に負けてしまいます。
- ・ユーチューブでシルビアを見ることができます。[Bit.ly/Silvia-Leppala](https://bit.ly/Silvia-Leppala)
- ・フェイスブック ([Bit.ly/fb-mq](https://bit.ly/fb-mq)) または ADAMS データバンク (bit.ly/ted-13th-projects) から写真をダウンロードしましょう。

豆知識

- ・約 188,000 もの湖をもつフィンランドには“1000の湖の国”というニックネームがついています。
フィンランドは国土の86%を松、エゾマツ、カバの木などを含む森におおわれており、ヨーロッパ最大の森林地域かつヨーロッパ最大の材木産出国となっています。



4. 平安な姉妹

セルビア



エレナ・ダブレビ 40歳

14歳のエレナは外見によって人の気を引こうとしていました。耳には2つか3つずつイヤリングをつけ、全ての指に2、3個ずつ指輪をはめていました。腕輪と銀のネックレスをつけ、お化粧もしました。

彼女の外見を見て彼女が幸せでないと想像する人は誰もいないでしょう。彼女は心の平安を求めています。

一方で19歳の姉リリャーナはニューベルグレード・セブンスデー・アドベンチスト教会でバプテスマを受ける準備を始めました。聖書の学びをする度に学んだことを家でみんなに知らせるのです。

「ねえねえ、私もうお肉は食べないわ」と彼女は言いました。

お母さんはそのことが気に入らず、肉を料理することをやめませんでした。彼女はお肉が入っていると分からないようにチキンを細かく刻み、トマトとこしょうとごはんを混ぜました。でもリリャーナはチキンを見つけて食べませ

んでした。お母さんは彼女に向かって腹立たしそうにわめきました。

それだけではありませんでした。安息日、リリャーナが教会へ行くために着替えるとお母さんはドアのかぎを閉め、彼女が家を出ていけないように見張りしました。

でもリリャーナはくじけませんでした。彼女は肉を食べることをやめ、安息日を家で守りました。お母さんはしょっちゅうわめいていました。

かわいそうに、エレナは姉や母と同じ場所にいたくなくて自分の部屋に逃げこみました。

エレナの心に平安はありませんでした。

でもリリャーナには平安がありました。お母さんがわめいても、彼女は落ちつきを失いませんでした。彼女は全て良いようになると確信しているようでした。エレナはリリャーナのもっている平安がほしいと思いました。

お母さんが姉に向かってわめく中、エレナは自分の部屋を行ったり来たりしながら、神様に祈りました。心を平安で満たしてくださいと。

「あなたが本当に生きておられるなら、私の心に平安をください」と彼女は言いました。

それは突然起こりました。彼女は心に安らぎを感じたのです。彼女はお母さんが何を言おうと神様に従おうと決めました。

エレナは自分の部屋で姉と共に毛布をかぶって祈ることを始めました。聖書を学ぶ時は2人で一緒に出かけていきました。雨が降る時でも道で2人は1つのかさの下で聖書を読みました。

しばらくして、エレナはバプテスマを受けたいと宣言しました。お母さんはひどくおこりました。

「あなたがこの屋根の下に住んでいる限り、あなたはバプテスマを受けられません」と彼女

は言いました。

エレナは聖書を読み続けました。彼女は十字架で死なれたイエス様の大きな犠牲に心を打たれました。「そうだ。後ろをふり向くことはできない」と彼女は思いました。

彼女はイエス様のために生きたいと願いました。ペトロ I・3：3、4に「あなたがたの装いは、編んだ髪や金の飾り、あるいは派手な衣服といった外面的なものであってはなりません。むしろそれは、柔和でしとやかな気立てという朽ちないもので飾られた、内面的な人柄であるべきです。このような装いこそ、神の御前でまことに価値があるのです。」と書かれているのを読みました。

エレナは思いました。「宝石と化粧品は私の偶像だ。そして私は自分と神様のあいだを何ものにもじゃまされたくない」

エレナにとって外見を変えろということは大変なことでした。彼女は自分のイヤリングや指輪、ネックレスや化粧品を愛していました。しかし、イエス様が天の全てのものを投げ出して彼女のために死んでくださったことを思いました。彼女は助けを求めて祈りました。

とうとう、彼女は1つの箱をとり、しくしく泣きながら宝石と化粧品を全てそこに収めました。まるで片腕をとられるような気持でした。でも箱にふたをしてからは、彼女の中に外見を飾りたいという欲求は全く消えました。

数か月後、彼女はバプテスマを受けました。リリヤーナとお父さんがバプテスマ式に参列しましたが、お母さんは来ようとしませんでした。

エレナはお母さんのために祈りました。6年間毎日祈りました。ある日、お母さんは聖書の学びをしたいと言い、バプテスマへと導かれました。

現在エレナのいちばん好きな聖句はエレミヤ 1：19 です。そこにはこう書かれています。「彼らはあなたに戦いを挑むが勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、救い出すと主は言われた。」

この聖句は私のモットーだと彼女は言います。「これは神様が私を助けてくださるという励ましです。神様は私の祈りを聞いて答えてくださいます。神様は私に平安をくださいます」

今期の 13 回献金の一部は、ニューベルグレード・セブンスデー・アドベンチスト教会が彼ら自身の建物に移るために用いられます。エレナが教会に最初に行き始めた時には映画館を借りて集会を行っていましたが、今はニューベルグレードに近い町のある建物を別の会衆と共同で使っています。皆様の惜しみない 13 回献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ・地図でセルビア、ベルグレードを見つけてみましょう。
 - ・子どもたちの一番好きな聖句をたずねてみましょう。
- 人生のモットーになるような聖句を選ぶよう挑戦させ、助けてください。
- ・ユーチューブでエレナを見ることができます。

bit.ly/jelena-Dubljevic

- ・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) 又は ADMS データバンク (bit.ly/peaceful-sister) で写真をダウンロードしてみましょう。
- ・13回安息日プロジェクトの写真をダウンロードしましょう。

bit.ly/ted-13th-projects

5. 宣教師の子

キプロス



インマヌエル・ムリロフ 9歳

インマヌエルはロシアのモスクワで生まれました。

でも彼はロシア人ではありません。両親はセルビア人で、彼もセルビアのパスポートをもっています。

でも彼はこれまでセルビアに住んだことがありません。彼が生まれた時、両親はロシアで宣教師として働いていたのです。

インマヌエルが3歳の時、両親は地中海の小さな島、キプロスに引っ越しました。インマヌエルは宣教師の子なのです。

インマヌエルはキプロスで1つの大きな問題にぶち当たりました。友だちが誰もいないことです。

でも、近所のふたごの赤ちゃんがすぐに大のお気に入りになりました。彼は毎日赤ちゃんたちの家をたずねていきました。

ふたごのお母さんは親切でした。

彼女はインマヌエルのお母さんにこう言いました。「うちにいれば息子さんは安全です。

うちに遊びに来ることを心配しないで。彼は誰のじゃまもしていませんから」

赤ちゃんたちはインマヌエルが来るととても喜びました。ベビーシッターがふたごを外の散歩に連れ出す時、インマヌエルも赤ちゃんたちが楽しんでいるか確かめながら一緒についていきました。彼はおもしろい顔をして見せたり、ボールを投げたり、ぐるぐる走ったりして赤ちゃんたちを笑わせました。

そのうち、インマヌエルはふたごを自分の家に連れていきたいと思うようになりました。

そのことを話すと、お母さんは「もちろんいいわよ」と答えてくれました。

散歩の途中、ベビーシッターは赤ちゃんたちがお母さんに挨拶できるように、インマヌエルの家に立ち寄るようになりました。

ある晩、夕食の支度ができたので、お母さんはインマヌエルを呼びましたが、インマヌエルはお腹がすいていないと言うのです。息子はいつもなら夕食時にはお腹をすかせているので、お母さんは心配になりました。

「どうしてお腹がすいてないの？」とたずねると、「ぼく、もう赤ちゃんたちの家で食べてきた」と言うのです。

こんなことが何度か続いた後、お母さんはふたごのママと話をすることにしました。

「ご親切を感謝しますが、インマヌエルには食べさせないでいただきたいのです」

ふたごの母親はにっこりしました。「あなたが何を気にされているのか分かっています」と彼女は言いました。「でも心配しないでください。息子さんは何が良くて、何が悪い分かっておられます。彼は清い食べ物と清くない食べ物について、私に教えてくれました」

お母さんは驚きました。豚肉、エビ、その他の清くない食べ物について聖書が何と言っているか息子に教えました。でもそのことを彼が他の人に話すとは夢にも思っていなかったのです。

ふたごの母親は続けてこう言いました。

「聖書の中には食べられる物と食べられない物のリストがあって自分で調べることができると息子さんが説明してくれました。だから、私は彼に清い食べ物だけをあげています。

お母さんはとてもうれしくなりました。神様はインマヌエルを通して彼女の祈りに答えてくださったのです。彼女はどのようにしてご近所にイエス様を伝えられるか祈ってきました。そして今、このふたごの母親は神様について話す用意ができていました。その日から、お母さんとふたごの母親はとてもよい友達になりました。

現在キプロスに住むインマヌエルは、単に宣教師の息子であるということをはるかに上回っています。たった9歳にもかかわらず、彼自身も宣教師なのです。彼の話す言葉や行いが近所の人達にイエス様をあかししています。彼の名前まで彼らにイエス様を思い起こさせるのです。インマヌエルとは「神が私たちと共にいます」という意味です。

「神様が隣人を愛しなさいと言われたから、ぼくは近所の人たちを愛しているんだ」とインマヌエルは言いました。

今期の13回献金の一部はインマヌエルの住むニコシアの町に教会とコミュニティセンターを建てるために用いられます。皆様が多額の献金をおさげくださることを感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ・地図でキプロスを見つけてみましょう。
- ・子どもたちに次のことを伝えましょう。
インマヌエルのお母さん、マリカ・ムリロフをこう言います。
「インマヌエルは彼の小さなやり方で神様の存在をとてリアルなものにしてくれます。彼は祈ることが大好きで、ご近所の方々と共に祈ることをはずかしく思っていない」
- ・どんなふうにしたらインマヌエルのようになれるか子どもたちに問いかけてみましょう。彼らに近所の方々のために祈ること、また今日の安息日学校のクラスで、その中でも特別に覚えたい人のために祈るよう勧めましょう。
- ・インマヌエルをユーチューブで見ることができます。bit.ly/Emmanuel-Mirilov
- ・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) 又は ADMS データバンク (bit.ly/missionary-kid) から写真をダウンロードしましょう。
- ・13回安息日プロジェクトの写真をダウンロードしましょう。

bit.ly/ted-13th-projects

豆知識

- ・キプロスムフロンは野生の羊の一種で、キプロスの陸上に住む最大の哺乳動物です。長年キプロス航空のシンボルとなってきました。



6. ペットが欲しいと祈った キプロス



レベル、ルーカス、
ニキ、ケリータ・パパイオアノ

安息日学校リーダー：キプロスでの伝道は容易ではありません。セブンスデー・アドベンチストの教会員は、この人口 110 万人の地中海の島にたった 103 人しかいません。しかし、ある宣教師一家はここで祈りへの驚くべき応答を体験しているのです。

ナレーター：宣教師の 4 人の子どもたちは、ずっと長いことペットを欲しがっていました。母国ギリシアから遠く離れたフィリピンへ引っ越した時、彼らはネコか犬が欲しいとねだりました。お父さんはアドベンチストの大学院で教鞭をとるのに忙しく、お母さんは 4 人の子どもたちの世話をしながら、教育の修士課程で学んでいました。両親はえさやりや世話が必要なペットを飼う気はありませんでした。

母（子どもたちに）：ペットはなしよ。

ナレーター：子どもたちはそれ以上ねだってもムダだと分かっていました。フィリピンで 4 年

過ごした後、家族は新しい任地であるキプロスに引っ越しました。お父さんは大きな庭つきの家を借りました。子どもたちは前よりも成長して、ペットを求める嘆願も勢いを増してきました。

レベル：ネコを飼うことはできる？

ルーカス：犬はどう？

ニキ：ネコが飼えたらどんなにいいかしら。

ケリータ：子ネコでもいいわ。

ナレーター：お父さんとお母さんの気持ちは以前と変わっていませんでした。でも、子どもたちのペットを求める合唱の中にあっても、彼らは「だめ」と言える正当な理由があることをうれしく思いました。

父：この家を借りる時にサインした契約書には「ペットはだめ」と書いてあるんだ。

ナレーター：それでも子どもたちはまだあきらめませんでした。

ケリータ：ペットが飼えるように祈ってもいい？

父（にやにや笑いながら）：好きなだけ祈っていいよ。

ナレーター：子どもたちはそれから毎晩祈りました。

レベル：大好きなイエス様、どうぞわたしたち

にネコをください。

ルーカス：犬でもいいです。

ニキ：ネコならうれしいわ。

ケリータ：子ネコでもいいですからください。

ナレーター：ところで、おとなりさんは大きなネコを飼っていました。そしてそのネコが3匹の黒い子ネコたちを生んだのです。生まれてから1か月たつと、子ネコたちは勝手に庭を探検し始めました。ある日、子ネコたちはレベルたちの庭と自分たちの庭をへだてている低いレンガの壁に穴を見つけ、そこをくぐりぬけて、宣教師の家にやってきたのです。

ケリータ：見て！　うちの庭に3匹の子ネコがいるわ！

ナレーター：それを聞いた3人も走ってきました。本当に3匹の子ネコたちが草の中で遊んでいました。じきに子どもたちは子ネコたちをなでたり一緒に遊んでいました。

子ネコたちは宣教師の庭に毎日来ました。大きくなってくると、庭にとどまるようになりました。宣教師家族の家の窓があいているとネコたちは窓から家の中に入ってくつろぐようになりました。

お父さんとお母さんは何も言うことができませんでした。だれかがネコをつれてきたわけではないので、ネコを戻してきなさいとも言えなかったのです。

子どもたちはわくわくしました。神様は彼らの祈りに応えて1匹どころか3匹もペットを与えてくださったのです。

安息日学校リーダー：私たちが祈る時、神さまは驚くべき方法で応えてくださいます。それがまさに、神様がキプロスでなさっておられることです。2012年にはアドベンチストの教会員は

約 75 名しかいませんでした。会員調査を行ったところ、たった 60 名のみが残りしました。でも教会員たちは祈りました。そして 2018 年には教会員数が初めて 100 名を超えました。神様が彼らの祈りに応えられたのです！

今、教会員たちはキプロスに新しい教会が建つよう祈っています。今期の 13 回献金の一部はその建築のために用いられます。皆様による 13 回献金を感謝いたします。

〈お話のヒント〉

- ・フェイスブック (bit.ly/fb-mq) または ADAMS データバンク (bit.ly/praying-for-pets) の写真をダウンロードしましょう。
- ・13回安息日プロジェクトの写真をダウンロードしましょう。(bit.ly/ted-13th-projects)

〈第 13 回安息日の前に〉

- ・保護者宛に 13 回安息日プログラムの案内をお送りし、6/27 の 13 回献金について、子どもたちにお声かけいただけるようお願いしましょう。私たちのミッション献金は、世界に神様の言葉を伝えるための贈り物であり、13 回献金の 1/4 がトランスヨーローッパ支部の 4 つのプロジェクトのために用いられることをクラス全員で確認しましょう。これらのプロジェクトについては『安息日学校聖書研究ガイド』の裏表紙をご参照ください。
- ・この話に登場する父親の名前はキム・パパイオアノといい、彼はキプロスのギリシアミニストリーのリーダーであると共に、新約聖書の非常勤講師もしておられます。
- ・13回献金が今回送られる 3 つの国、キプロス、ノルウェー、そしてセルビアを地図で子どもたちに示しましょう。